

■自然共生園とは

東北地方のきびしい自然と人とのかかわり合いによって育まれた文化や自然を体験したり、楽しみながら学ぶことができるフィールドです。里の田園風景や、居久根、草原、湿地、牧野などの自然を再生しています。

■見どころ紹介

～里地の自然～

耕作地・水田・居久根

畑では、ソバや麦、青菜や蕪、豆類など東北地方の食文化にちなんだ作物を栽培しています。春は青麦が風にそよぎ、夏はソバの白い花が一面を覆います。秋は柿や栗が実り、懐かしさとぬくもりのあるみちのくらしい里地の風景が楽しめます。

「居久根」とは屋敷林のことで、季節風を防ぐだけでなく、落葉や焚付けを採るための暮らしに欠かせない林でした。山菜や薬草も栽培されました。居久根に植えられた、田打ち桜とよばれるコブシが咲くころになると、その年の農作業が始まります。

～水辺の自然～

湿生花園・ヨシ原・スゲ原・ヤナギ湿地林・小川・池

湿生花園では湿地を再生し、湿地特有の野草をタネから育て増やしています。カキツバタ、ノハナショウブ、チダケサシ、クサレダマ、ヌマトラノオ、ミソハギ、コバギボウシ、サワギキョウ等が咲きます。

ヨシ原やスゲ原、ヤナギ湿地林は、かつての水田の跡地です。初夏のヨシ原ではオオヨシキリが子育てを行います。園内を流れる小川ではアブラハヤやスナヤツメ等の魚類、カワトンボ等の水生動物が生息しています。

～草原の自然～

展望野草園・サクラソウ園・放牧区

茅などの草が暮らしの必需品であった時代には、各地に草原が維持されていました。草が利用されなくなると草原もなくなり、今では草原特有の動植物が絶滅に瀕しています。ここでは、人の手で維持されていた動植物が豊かな草原（半自然草原）の再生を目指し、オキナグサ、サクラソウ、カワラナデシコ、キキョウ、リンドウなど、50種類ほどの野草をタネから育てて増やしています。野草が彩る広大な草原には、ハナバチやチョウ、ヒバリやキツネ等、草原の生き物も訪れるようになりました。

～樹林の自然～

コナラ林・崖線樹林・ヤナギ林

コナラ林や崖線樹林では、下刈を行って明るい雑木林を再生し、樹林特有の野草を育成しています。春にはルリソウ、クリンソウ、初夏にはニッコウキスゲ、夏にはソバナ、秋にはキバナアキギリ等、四季折々の野草が咲きます。野草の豊かな雑木林の散策が楽しめます。



～展望野草園からの蔵王の眺め～

快晴の日には、展望野草園の頂から屏風岳、熊野岳など蔵王の山々の眺めが楽しめます。

また、東側には、北川を挟んでコナラの雑木林で覆われた里山地区や、こんもりとした釜房山が望めます。里山地区へは、ドックランの近くの「ゆいっこ橋」を渡って歩いて行けます。



～体験施設～

自然共生情報館

自然共生園のことや東北地方の自然共生について、展示や映像などで紹介しています。各種のイベントや、野の花情報、生き物情報なども発信します。手仕事の展示や体験もできます。

知恵体験舎

板の間や縁側で、のんびりと休憩できます。体験イベントでは、農作業体験や、ここで採れた作物を使った食品加工体験など、みちのくの自然との共生が育んだ暮らしの知恵が学べます。

●お問い合わせ先：みちのく公園管理センター

T E L 0224-84-5991（自然共生園担当）

〒989-1505

宮城県柴田郡川崎町大字小野字二本松 53-9

<http://www.michinoku-park.info/wp/>



今日はここを観てみよう！

■春のお目覚め

ウグイスカグラ（位置A）

早春に咲く低木です。鶯が隠れそうな枝が混み合う姿や、鶯が鳴く頃に咲くことが名の由来のようです。ハスカップの仲間で、甘い赤い実をつけます。



ネコヤナギ（位置C）

硬い帽子が取れはじめ、ぺんぺろっこと呼ばれる白銀色のピロードの花が現れます。花屋でも売られていますが、野生のネコヤナギはあまり見たことがないのでは？



ヤナギの花（位置D）

3月下旬になる、いろいろなヤナギの花が咲き始めます。銀白色の花芽が開花して黄金色の花に変わります。タチヤナギ、オノエヤナギなど、少しずつ異なります。



今日はここを観てみよう！

■春が来た

オキナグサの芽吹き（位置G）

3月中旬になると、展望野草園のオキナグサが芽吹き始めます。白銀に綿毛に包まれたオキナグサのつぼみが、キツネ色の枯草の中で、春の訪れを伝えています。



カタクリの芽吹き（位置B）

宮沢賢治の童話「おきなぐさ」では、カタクリはオキナグサのお花の友だちです。でも、オキナグサは野の花で、カタクリは森の花。なかなか会える機会は無さそうです。きっと花蜂が、野原と森をつないでいる。



セリバオウレン（位置I）

山地の湿った谷あいなどに生えます。とても苦い根茎は生薬に利用されます。共生園では居久根に生えており、生薬として栽培していたようです。



今日はここを観てみよう！

■春のお目覚め

フキノトウ（位置各所）

雌花と雄花のフキノトウがあります。雌花はやや黄色味があり、星型の花弁が混じります。雄花は糸状で白っぽく少し褐色が混じります。雌花ばかりの場所と雌花ばかりの場所があるのは、何故でしょう？地下茎で同じ株が繋がっているためです。雄花はすぐに枯れ、雌花は伸びて実を飛ばします。



雄花



雌花

ニホンアカガエル（位置E）

他のカエルがまだ冬眠しているこの時期にいち早く目覚め産卵します。産卵後はまた冬眠するらしくて、姿が見えなくなります。



今日はここを観てみよう！

■ハシバミの花（F）

ハシバミはカバノキ科の低木でヘーゼルナッツの仲間です。ヘーゼルナッツは、中央アジア原産で、カカオの入手が困難な時代のイタリアで、ヘーゼルナッツのペーストをカカオが少ないチョコレートに加えて、コクを出したそうです。垂れ下がっているのは雄花、そして、雌花は紅色で2ミリほどの糸のよう。。。



雄花



雌花

ハンノキ（位置H）

ハシバミと同じ仲間で、こちらは高木です。やや赤い雄花をさげます。小さな松ぼっくりのような去年の実が残っています。



今日はここを観てみよう！

■さと～のべ～やまを歩こう

自然共生園の東側を流れる北川を挟んで、雑木林で覆われた里山地区があります。かつては「やま」と呼んでいた『里山』です。これに対して、自然共生園は、畑の中に居久根が点在する「さと」や、広々とした茅場が広がる「のべ」で構成された『里地』です。居久根のある民家跡地に建てられた知恵体験舎やそのまわりの田畑が「さと」、一段さがった花野やススキの草原が「のべ」、さらに奥に見える雑木林が「やま」になります。



かつての「やま」では、薪や落葉、山菜、きのこを採り、炭を焼きました。「のべ」の草原では、家畜の飼料や堆肥となる草を刈り、屋根材にする茅を育て、家畜の放牧を行っていました。「さと」の暮らしにとって、「のべ」や「やま」は欠かせない場所で、「さと」「のべ」「やま」には強いつながりがありました。現在の暮らしには、「のべ」や「やま」がもたらした恵みも、経済的な価値がなくなってしまいました。その結果、「のべ」の草原が無くなり、「やま」は鬱蒼として、獣害などの社会問題が生じています。でも、身近な里地里山の自然と馴染みになると、身のまわりに起こっている自然の大きな変化にも敏感になってしまいます。そのことが、今の時代の里地里山の恵みなのかもしれません。